

# 「草木塔の心」で地域に根ざした大学へ

## 山形大学の法人化と地域とのかかわり



国立大学法人山形大学  
学長 仙道富士郎

この四月一日に山形大学を含む八十九の国立大学は国の行政組織としての長い歴史を閉じ、国立大学法人となった。山形大学の名称も正式には「国立大学法人山形大学」ということになる。戦後の学制改革にも匹敵する今回の制度改革は既に種々の変化を国立大学に起こしつつある。本項においては、山形大学の学長として、この法人化をどのように把握し、これを一つのてこにして、地域とどう向き合っていくかとしているのか、その想いを述べてみたい。

### いろいろな夢を語る学長たち

仕事柄、各大学の学長さんたちと話をすることが多い。時にはお酒を友として何時間にも渡って談笑することもある。最近気づいたことがある。以前に比べると彼等は夢を語るものが多くなった。法人化以前は愚痴が多かった。曰く、「文系の人たちは何を考えているのかさっぱり分からん」、「曰く、「評議会であの議論は何だ」、「かくいう私も学長に就任したとき、大学とは何と手続き論に終始するところであることよ。こんな事では一歩も進まないだろうに…」と思った。

ところが、自分のことはさておき、法人化になって国立大学の学長たちは皆、意気軒昂けんきゆうなのである。これは、法人化に伴って制度上学長の力が強くなったことに起因するところも大きいように思う。もっとも脳動脈硬化に陥っている学長たちが独断で思い込みの強い案を連発することが大学の将来にとって良いことなのか多いに疑問の残るところではあるのだが…。

私の言いたい真意は、ちよつと違うところにある。従来横並びであった国立大学の隊形が、今回の法人化に伴って明らかに崩れつつあることを感ずるのである。学長の掛け声に呼応して懸命になって振り落とされまいとがんばる大学、法人化など構いなく、従来の手続き論に終始する大学等々、法人化による大学の自由化に伴って大学間の格差は広がっていくだろうと思ふ。法人化六年後には各国立大学は評価委員会の評価を受けることになるが、その際の厳しい評価によってそれ以降の予算の減額措置を被る

流

大学も出てくるだろうと思う。一方、いわゆる弱小大学でも良い評価を得て伸びていく大学も現れるはずである。

### 「国立大学法人山形大学」の今後の歩み

「いったい大学の評価などどうやってやるのだ?」、「法人化とは人減らし、金減らし、今後の大学は成り立ちいかないので?」等々、今回の国立大学の法人化が多くの問題を抱えていることは事実である。しかし、長い間「大学の自治」の名のもとに何もしてこなかった国立大学が生まれ変わる良いチャンスでもあると思う。私は少なくともそう位置づけたい。どのように生まれ変わるのか、私の考えていることの概略は山形大学のホームページ等で紹介してきたので御参照いただきたい(<http://www.yamagata-u.ac.jp/index.html> 学長室だより)。この項では「山形大学と地域の関係」にしばって日頃考えていることを記してみたい。

私は最近山形大学の将来のことを語るとき、必ず「草木塔」のことについて触れる。千歳栄氏の御著書で草木塔のことを知り、すっかり感動してしまったのである。聞くと

ころによると、全国にある草木塔のほとんどがこの山形にあるということで、草木の命をもいとおしむ山形の人々の心から学ぶことを「地域とのかかわり」の原点に置きたいと思う。イラク戦争、イスラエル、パレスチナ紛争等々、世界はまさに憎しみの渦つばである。この憎しみの基本構造を超越するパラダイムを作り上げない限り、世界は奈落へと突き進んでいく以外に道はないように思う。憎しみの構造の対極にあるもの、それが草木塔の心であり、世界的に求められているニューパラダイムの一つではないだろうか。

そんな精神論ではどうにもならない、具体



「敷居の低い大学」を目指して奮闘を続ける山形大学の授業風景。

# 潮

的にどうするのかという声が聞こえてきそうな気がする。「敷居の高い山形大学」と言われてきたが、実は、法人化の声が聞こえる前から、山形大学と地域との交流は活発に展開されてきたのである。それはいま二つのことに大きく花開こうとしている。一つは二十一世紀COEプログラム（センター・オブ・エクセレンスの略。第三者評価による競争原理の導入により、国公立大学を通じて、優れた研究教育拠点に重点支援を行う）、世界最高水準の大学づくりを推進する事業。平成十四年度より文部科学省によって進められている）に採択された「地域特性を生かした分子疫学研究」である。これは個人個人の体質にあわせた治療法を開発しようとするいわゆるテーラーメイド医療に関する研究の一つであるが、そもそもその源流は、山形大学医学部の先生方の舟形町における二十五年に及ぶ糖尿病検診にある。二十五年にわたって舟形町の人たちと一緒に町民の健康増進に協力してきた山形大学医学部の「知」がいま未来の先端医療への懸け橋になるうとしていたのであり、それは他の市町村のさらなる参加も得て、さらに大きな輪に広がるうとしていく。

未来の光として注目されている山形大学工学部城戸教授等のグループによる有機ELの研究にも多くの地場産業が参画している。この研究が山形のもの造りの活性化に役立つ日が一日も早く到来することを願っている。

## 地域住民に生涯学習の機会を提供

以上のような大型プロジェクトはもちろん大切であるが、大学と地域との交流は大学の日常業務の中にそれが組み込まれた形で展開されるのが基本だと思う。大学には多くの文化的な資料が山積しており、地域の方々にもそれを利用していただきたい。山形大学ではこれまでも附属図書館や附属博物館などいろいろな資料の展示を行ってきたが、山形大学のことをさらに地域の方々を知ってもらうために、今度小白川キャンパスの一部にインフォメーションセンターを開設することにした。より多くの方々がここを訪れて、山形大学を生涯学習の糧として利用するための糸口にしていただければと願っている。

### 仙道 富士郎（せんどう・ふじろう）

国立大学法人山形大学長。

秋田県羽後町出身。山形市緑町1丁目。

専門分野は免疫学。

昭和50年北海道大学医学部附属がん研究施設助手時代に、アメリカ合衆国NIHでの研究従事中、「NK細胞」を発見した。

昭和50年6月山形大学医学部助教授として山形大学に着任する。学生部長、医学部長等の要職を務めた後、平成13年9月に山形大学長に就任し、現在に至る。

平成10年4月には日本寄生虫学会第45回小泉賞を受賞した。